

主要ターミナル周辺の景観特性比較から捉えた大阪らしさに関する考察

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学過程

杉本 真莉

1. 研究目的 大阪市は、近年観光都市としての性格を強め、国内外からの来訪者や観光客が急増しており、地域らしさを印象付ける地域資源を活かした個性的なまちづくりが求められている。本研究では、大阪市のアイデンティティとしての「大阪らしさ」を明らかにすることにより、今後の個性豊かな景観まちづくりに関する知見を得ることを目的とした。

2. 研究方法 まず「梅田」「難波」「天王寺」の3ターミナル駅周辺を調査対象エリアに設定し、エリア毎に建物更新年・建物主用途・建物高さ別の土地利用現況図を作成するとともに、項目ごとの面積構成率を算出して物的環境特性を把握した。次に、複数の観光ガイドブックに掲載された写真を各エリア8景、計24景を調査対象景として抽出し、現地にて同一視点・視対象の写真を撮影した(H27,8)。調査では、写真画像内における景観構成要素の画面占有率を計測した。また、各エリアの8景を刺激写真として、本学域学生62名を被験者とし、18対の情緒的語句を用いて地域イメージについて意識調査した。解析では、エリア毎に8景の平均評価点を用いて因子分析法を適用し、代表する因子を捉えた。次いで、因子得点を用いた2次元布置図上の8景を類型化し、各“らしさ”を表出する景観特性を探った。

3. 梅田らしさの解明 因子分析の結果、第1因子を『都市的快適性』、第2因子を『立体感』と判断し、8景を3タイプ(I~III)に分類できた。Iは立体感があり潤いに満ちたタイプであり、U-⑤, ⑦の2景が属している。可動物や広告物があまり見られず、奥行きと落ち着きのある景観を呈している。IIは潤いを感じられるタイプであり、U-①, ④, ⑥, ⑧の4景である。壁面位置の統一が連続的イメージを形成し、広範囲の植栽の存在が潤い性を助長している。IIIは平坦で潤いに乏しいタイプであり、U-②, ③の2景である。人工的な印象が目立つような景観が形成され、植栽の少なさが潤い性の評価を低くしている。梅田エリアでは1994年以降の開発事業による急激な景観変化がみられ、先進性のある更新に伴う高い都市的快適性を備えている。また、ターミナル駅周辺での超高層建築の多さが、『立体感』のイメージ形成に寄与していた。

4. 難波らしさの解明 因子分析の結果、第1因子を『都市的快適性』、第2因子を『快活性』と判断し、8景を4タイプ(I~IV)に分類できた。Iは快適性を備え活気と賑わいに満ちたタイプであり、N-②, ⑧の2景

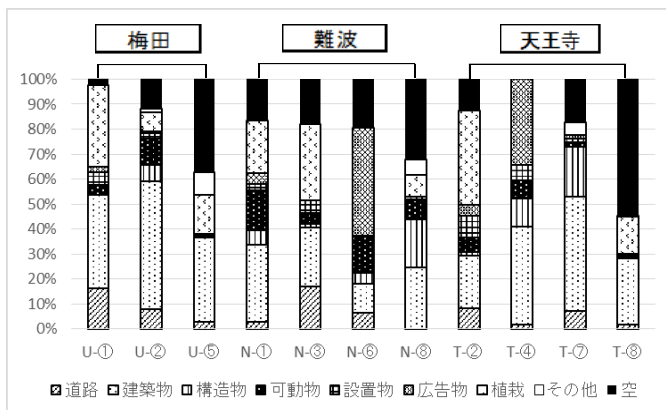


図1 景観構成要素の画面占有率 (各エリア代表)

が属している。豊富な植栽の存在と遠景に見える空が、景観に奥行きと広がり感を醸し出している。人も多く視認され、賑わい性が確認できる。Ⅱは快適性を欠くが、活気と賑わいに満ちたタイプであり、N-④, ⑤, ⑥, ⑦の4景である。商品・ワゴン等の設置物や広告物などが多く存在し、ファサードが雑多で、人の密集度も高く活気と賑わいが際立っている。Ⅲは快適性を備えるが、活気と賑わいが乏しいタイプであり、N-③の1景である。建築物より前面にある植栽が画面前面に広がり、無機質な建物の圧迫感を軽減して開放感と快適性をもたらしている。Ⅳは快適性及び活気と賑わいに乏しいタイプであり、N-①の1景である。統一したスカイラインが形成されているが建物の密集感は強く、植栽の存在感は弱い。難波エリアは更新年代や用途、高さが異なる建物がエリア内に混在し、雑多な印象がある。主として人やモノの密集度が高く、活気や賑わいを伴う景観が多いが、新しく整備された景観では快適性も認められた。

5. 天王寺らしさの解明 因子分析の結果、第1因子を『都市的快適性』、第2因子を『生活感』と判断し、8景を4タイプ(I~IV)に分類できた。Ⅰは快適性を備え、良好な生活空間を伴うタイプであり、T-⑧の1景が属している。地面を覆う芝生と低い位置に見える空が、広がり感と潤い性をもたらしている。Ⅱは適度な快適性と生活感を伴うタイプであり、T-①, ②の2景である。設置物や広告物、人が多く見られ、ヒューマンスケールな界限性が生活空間イメージを助長している。Ⅲは適度な快適性を保つが、生活感を欠いているタイプであり、T-③, ⑦の2景である。歩道橋等の様々な建造物が画面の半数以上を占め、人工的な印象が目立つ。Ⅳは快適性に乏しいが、生活感を伴うタイプであり、T-④, ⑤, ⑥の3景である。商品・ワゴン等の設置物や広告物が非常に多く、潤い性の欠如と高い賑わい性が見られる。建物の高さや構造は大都市としてのイメージを遠ざけている。天王寺エリアでは、1994年以降の再開発事業による景観変化が多数見られるが、都市公園の存在を含め人々の営みや生活空間としての温かみのある景観が形成されていた。

6. まとめ 大阪市の主要3エリアはそれぞれ異なる景観特性をもちあわせており、このような個性豊かな地域が混在していることが、大阪市のアイデンティティと言える。観光都市としての性格を強める同市の今後のまちづくりに際しては、それぞれの地域の個性を活かすことが必要だと考える。また本3ターミナルを繋ぐ他地域の“らしさ”を発掘し、市内をネットワーク的に訪問することで得られる大阪らしさを感じ取れる物語性を構築していくことも、今後の大阪市のまちづくりにおいては必要である。

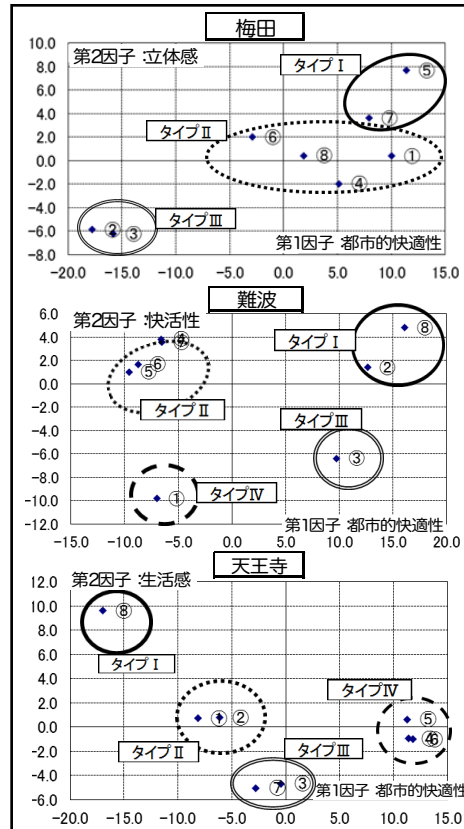


図2 因子得点散布図